

外国人と日本人が共に学ぶ 地域日本語教育の実践

—コミュニティ参加を促す取組を中心に—

杜 長 俊, 唐木澤 みどり

1. はじめに

日本に在留する外国人は、2020年12月末現在で約289万人、全人口の2.3%となっている（出入国在留管理庁2021）。この10年で4割近く増加しており、今後も増加が予想される。そのため、外国人が日本で暮らすために必要な日本語学習をサポートすることはさらに重要な課題となっている。このような背景もあり、令和元年（2019年）に「日本語教育の推進に関する法律」（以下「推進法」）が施行された。推進法では、日本で暮らす外国人が「日常生活及び社会生活を国民と共に円滑に営むことができる環境の整備に資する」こととともに「多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現に資する」ことが目的として明示されている。そのため、基本施策の中には外国人の日本語能力向上だけでなく、「共生社会の実現に資することを踏まえ、外国人等に対する日本語教育についての国民の理解と関心を深める」とあり、日本人の理解と関心が重要であると述べられている（文化庁2019）。

したがって、地域の日本語教育においては、外国人が日本における生活に必要な日本語や日本の文化、慣習を学ぶだけでなく、日本人も外国人とのコミュニケーションについて学ぶ必要があり、外国人と日本人との相互理解を促進していくことも、日本語教育の重要な責務である。日本人と外国人がコミュニケーションをとるためには、日本語が母語である日本人も、外国人の日本語能力に応じて、自身の日本語を調整し、わかりやすい日本語を使うことが求められる。そこで、外国人にとってもわかりやすい「やさしい日本語」が注目されている。出入国在留管理庁・文化庁（2020b）は、共生社会実現に向けたやさしい日本語の活用を促進するため、「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」を作成し、公開している。その理由として「日本に住む外国人が増え、その国籍も多様化する中で、日本に住む外国人に情報を伝えたいときに、多言語で翻訳・通訳するほか、やさしい日本語を活用するこ

とが有効」と述べられている。

しかし、外国人が生活に必要な日本語を学ぶ場と、日本人が外国人とのコミュニケーションのための日本語を学ぶ場は別々であることが多い。そのため、それぞれが学んだ日本語を使うためには他の場を探す必要があり、日本人、外国人とも日常的に関わる機会がない場合は、積極的に交流の場を探さない限り、使う機会は限られてしまう。そこで、外国人と日本人が共に学ぶことを目指す日本語教育実践によって、実際にコミュニケーション活動を行いながら、互いのコミュニケーション能力を伸ばすことが望まれているのではないか。本稿で報告するのは、外国人と日本人が共に学ぶ地域日本語教室である。

II. 外国人と日本人が共に学ぶ地域日本語教室

1. 学習院大学の地域に開かれた日本語教室

学習院大学では、2013年から文化庁委託事業「生活者としての外国人」のための日本語教育事業「地域日本語教育実践プログラム」の中で、地域に開かれた日本語教室を運営している。2013年から2018年までは国際研究教育機構の事業として、2019年からは、国際センターの事業として継続している。本稿では、この国際センターにより運営されている地域に開かれた日本語教室の1つとして2019年に開講した「外国人と日本人が共に学ぶ日本語教室」(以下、「本教室」)の実践を報告する。

本教室の目標としては、「外国籍住民が社会の一員として生活するために必要となる日本語能力の基礎を身に付ける場を設ける」、「公的機関、民間交流団体、各種サークル等との活動を通じ、コミュニティの中で自律的・協働的に学び続けるための能力を培う」ことが挙げられる。さらに本教室は「活動を通じ、日本語及び日本社会、外国籍住民について日本人が理解を深める場を作り、双方のコミュニケーション能力の向上を図る」ことを特に重視した教室設計を行った。(文化庁2020a)

そして、上記の目標を達成するために以下の内容を取り入れた。

- ① 多様な背景、ニーズ、生活環境に配慮した活動や教材を設計し、教室活動を行った学習者が日本語の学習や使用を自律的に管理する機会、達成感のある学びの機会を多く取り入れた。
- ② コミュニティの中での学び：コミュニティの参加・活用・形成を行いながら、社会の一員となることを意識できる活動、他者との活動を通じて自律的・協働的に学ぶことを実感できる活動を取り入れた。

- ③ 双方のコミュニケーション能力向上：外国籍住民と日本人がいずれも主体となる活動を取り入れ、相互理解を深めると同時に、それぞれがコミュニケーション能力の向上、コミュニケーションの工夫ができる機会を設けた（文化庁 2020a）

本教室は、上記内容の中で、①をベースとしながら、外国人と日本人が共に学ぶ教室として、③の「双方のコミュニケーション能力向上」のための活動を中心とし、活動の中で、②の「コミュニティの中での学び」を実現することを目指した。それゆえ「コミュニティ参加を促す活動」が特に重要であると考え、授業を設計した。本教室の実践を振り返り、その成果と課題を検討することを通して、「日常生活及び社会生活を国民と共に円滑に営むことができる環境の整備に資する」、かつ「多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現に資する」日本語教育実践についてのヒントが得られるのではないかと考えた。本稿では、1年間のプログラムの中で、コミュニティ参加を促す活動を中心に報告する。

2. 教室参加者について

本教室の参加者は、様々な背景を持っている。次の表1のように①教室運営者②日本人学生③日本語学習者という3つに分けることができる。

表1 本教室の参加者

	属性	教室での役割
①教室運営者	日本語教育の経験者（コーディネーター）と日本語教育を主専攻としている大学院生	授業設計 教材作成 話し合いの進行役
②日本人学生	「多文化理解+コミュニケーションを学ぶ講座」の募集に応募した日本人学生	受講者
③日本語学習者	学習院大学の地域日本語教室の募集に応募した地域在住の外国人	受講者

まず①教室運営者としては、コーディネーター2名と日本語教育を主専攻としている大学院生が教室に関わっていた。コーディネーターの役割は、参加者の募集や連絡等の事務的な作業もあったが、コース全体の目標を設定し、それに基づいて各回の授業の内容をあらかじめ設計することが主要なものであった。本稿の執筆者2名は、コーディネーターとして本教室に関わった。日本語教育を主専攻としている大学院生は、内容に基づいて教材作成を行うことと、授業における話し合いの進行役を務めることであった。そして②日本人学生というのは、学習院大学に通っている日本国籍の学生のことである。学内で「多文化理解+コミュ

ニケーションを学ぶ講座」という内容で募集を行い、海外で暮らした経験がある人や、海外留学の計画を立てている人等、10名が集まった。日本人学生に対しては、日本語学習者である外国人と共に学ぶというイメージが分かりにくいことを想定し、毎回のセッション開始の約1週間前に2回ずつ、オリエンテーションを行った。そこで、各回の授業の内容を説明するとともに、参加予定の日本語学習者のレベルや国籍等の情報提供し、参加者の質問に答えるようにした。また、言語調整についても簡単に説明した。③日本語学習者というのは、会社や工場で働く人や日本人と結婚した人など、日本の地域社会で暮らしを営む住民である一方、日本語のできることを増やすために、地域日本語教室に通う学習者のことである。本教室は、豊島区の地域日本語教室の1つとして開講し、日本語学習者が30名参加した。30名の中では「中国」と「台湾」の学習者が3分の1を占めているが、シリア、ミャンマー、ポルトガル、アメリカ、イギリス、ウクライナ等、国籍の多様性があった。学習者の日本語能力は、初級から上級までかなりのばらつきがあったが、作成教材で取り扱う語彙や文型は初級後半というレベルに合わせた。

3. 年間プログラム

各授業の目標と内容については、教室運営者が話し合いを通して決定し、受講者（日本人学生と日本語学習者）に事前に知らせていた。全24回の授業を設定しているが、8回が1セッションとなるように構成し、「マナー・ルールについて話そう」「仲間とともに取り組もう」「暮らしを良くしていこう」というように各セッションのイメージを明示し、学習目標の可視化を目指していた。24回の授業のうち、台風により1回が中止となったが、その次の授業の内容に中止した授業の内容を含める形で対応した。各回の授業活動としては、グループでの話し合いが中心となるが、動画や写真、文章等を用いてテーマ設定や話題提供する「導入」と、各グループで話した内容のポイントを進行役がまとめ、グループ間で意見を交換する「共有」が行われていた。24回分の授業のテーマについて、次の表2にまとめた。

第1セッションは、生活のあらゆる場所や場面に存在するルールやマナーについて、お互いの意見や観点を理解する内容である。自身の意見を述べる際に、その意見について根拠や理由を説明することを通して、お互いの意見や感想をより具体的に理解する形で、話し合いの中で相互理解を深めることが目標であった。第2セッションは、お互いの性格や内面を知る活動や、イベント開催やゲームを通して仲間を作るという内容である。ゲームを共に楽しんだり、イベント開催でアイデアを出し合ったり、仲間意識を目指すことが目標であった。第3セッションは、コミュニティ参加を通して、生活を豊かにする内容である。第3セッションについて次章で詳述する。

表2 授業のテーマ

第1セッション マナー・ルールについて話そう	
① 沈黙を破る話題	② 学校の校則
③ 食事のマナー	④ 断り
⑤ 電車のマナー	⑥ 謝り
⑦ 時間の感覚	⑧ プレゼント
第2セッション 仲間とともに取り組もう	
⑨ 仲間づくり (初対面)	⑩ ゲーム大会 (かるた)
⑪ ゲーム大会 (国のゲーム)	⑫ 仲間づくり (仲良くなる)
⑬ イベント計画	⑭ イベント準備 (ストーリーテリング) ※台風により中止
⑮ イベント準備 (リハーサル)	⑯ イベント実施
第3セッション 暮らしを良くしていこう	
⑰ 知り合おう	⑱ 変えてほしい
⑲ いつもしていること	⑳ 相談してみよう (生活の悩み)
㉑ コミュニティ参加の経験を聞く	㉒ コミュニティを探す
㉓ 相談してみよう (コミュニティ参加)	㉔ これからの私

III. コミュニティ参加を促す取組「第3セッション：暮らしを良くしていこう」

1. 第3セッションの内容

前述したように、本教室の授業は3セッション構成をとっており、それぞれのセッションのイメージが示されている。その中で第3セッションは、暮らしの質を高めていく方法として、コミュニティ参加・活用を考える内容になっている。具体的には、自身の事情や悩みを開示したり、相手に対して助言や理解を示したりするなど、コミュニティのメンバーと人間関係を構築する必要な言語行動を実践するとともに、相手の経験や意見を取り入れ、その中から自身の暮らしを良くしていく情報や動機を得るという形での相互理解を目指した。前半の4回は、「変えてほしい (第18回)」「いつもしていること (第19回)」など、暮らしを営む中での事情や悩みを話し合う活動が行われた。後半の4回は、コミュニティ参加経験を聞く活動や参加したいコミュニティを探すなど、コミュニティ参加に焦点を絞った。以下にコミュニティ参加を促す実践事例として、コミュニティ参加の経験を聞く (第21回)、コミュ

ニティを探す（第22回）、これからの私（第24回）の3回の授業を報告する。

2. コミュニティ参加の経験を聞く（第21回）

コミュニケーション参加の経験を聞く回は、以下3つの学習目標を設定した。

1. コミュニティ参加の話聞いて、どんな話なのかを整理できる
2. コミュニティ参加の話聞いて、詳しく知りたい部分について質問できる
3. コミュニティ参加の話聞いて、自身の経験や意見を話すことができる

この授業では、外国籍住民（M氏）をゲストとして招いた。M氏は日本の地域のコミュニティに積極的に参加している外国人として新聞等で注目されている方である。授業の前に、M氏のライフストーリーを掲載した新聞記事を読み、その記事内容からM氏の「地域に溶け込むために努力したこと」を読み取る宿題を与えた。そして、授業では前半の活動と後半の活動を行った。前半の活動は、「日本に来た当時のつらい状況」「その状況を変えるための努力」「現在参加しているコミュニティ」についてのM氏の講演を聞いて、以下の2つの問いを中心にM氏の講演を振り返る活動を行った。

- A) 外国で生活を始めた当時、M氏と同じような大変だったことはありますか。いまはどうですか。
- B) M氏はいろいろ頑張りました。皆さんはどんなことを頑張りましたか。

以上の2つの問いについて、グループに分かれて話し合いを行った。来日当時から今現在に至るまでの「ライフストーリー」を言語化しようとする日本語学習者の行動と、その話を注意深く聞いて時折質問をする日本人学生の行動が見られた。このことから、M氏の経験を聞く活動は、日本語学習者が自身の過去を振り返り、それを言語化し、誰かに伝えるという動機付けになっていると同時に、日本人学生にとって外国人が置かれている状況やその状況を打開する努力や姿勢が各々違うことに気付くことで外国人理解を深めるきっかけになっていると言えよう。

そして、後半の活動は、参加者のコミュニティ参加の経験に焦点を当て、以下の2つの問いを中心に各自の経験を共有する活動を行った。

- C) コミュニティに参加したことがありますか。あれば、他の人に話しましょう。なけ

れば、人の話を聞いて、感想や意見（いいと思うところ・よくないと思うところ）を言いましょう。

D) グループのメンバーのコミュニティに参加の経験を聞いて、興味がわきましたか。

各グループの話し合いでは、コミュニティ参加をめぐる過去の経験を共有することにより、「私もそれに興味がある」というように同じ分野や領域に興味があることに気付いたり、「そういうコミュニティがあるのだ」というように新情報や刺激を受けたりする様子が観察されている。こうしてコミュニティ参加に前向きになる態度が見られた一方、「時間がない」「場所が遠い」「人間関係が面倒くさい」等、参加を阻害する要因について話し合った人もいた。このように、運営側が一方的に推奨をする形ではなく、参加者同士の経験を踏まえて参加者が正直な気持ちを示し、コミュニティ参加の現状を把握する形で、コミュニティ参加を考える活動になっていると言えよう。

3. コミュニティを探す（第 22 回）

コミュニティを探す回では、以下 2 つの学習目標を設定した。

1. コミュニティ参加の経験者によるコミュニティの紹介を聞いて、そこで何ができるか、理解することができる
2. 自分が参加したいコミュニティを探して、そこで何ができるか、何をしたいか、情報を収集することができる

この授業では、日本語学習者として本教室に通う外国人住民（H 氏）と H 氏が参加しているコミュニティメンバー（A 氏と T 氏）をゲストとして招いた。授業の前に、H 氏が参加している区民ひろばのパンフレットを見て、どんなサークルやコミュニティがあるかを読み取る宿題と、自身が住んでいる地域の区民センターや公民館の情報を調べる宿題を与えた。そして、授業では、前半の活動と後半の活動を行った。前半の活動では、H 氏のコミュニティ参加の経験と、A 氏らの区民ひろばの紹介を聞いて、質疑応答を行った。H 氏自身にとって日本語学習者として地域のコミュニティに参加した経験を話すことができたことは達成感が得られる活動となった。H 氏の経験談を聞き、地域コミュニティ参加の経験がないまたは少ない参加者から刺激を受けたという声が寄せられた。そして、A 氏らの紹介に対しては、区民ひろばで実施されるサークル活動の詳細について質問が集中し、地域のコミュニティの中身に興味・関心が引き出されている。

後半では、「コミュニティを探してみよう」という活動を、以下の2つのステップに分けて行った。

- ① 「コミュニティに参加している人は自分の経験を話す」
- ② 「これから参加したいコミュニティを探す」

まず、①「コミュニティに参加している人は自分の経験を話す」というステップでは、「どんなコミュニティ」「いつ」「どこで」「いくら（参加費用）」「どうやって参加する（申込方法）」という5つの項目で、参加しているコミュニティをメンバーに紹介した。そして、②「これから参加したいコミュニティを探す」というステップでは、スマートフォンを用いて、家の近くの区民センターや区民ひろばのような施設を探し、参加したいコミュニティの時間、費用、申込方法等を調べる活動を行った。

①では、グループメンバーが参加している「読書会」「勉強会」などに興味を示し、「私もそのようなコミュニティを探してみよう」と、情報交換を通してコミュニティ参加の意欲が引き出されていると考える。これに対し、②において在住地域の自治体ホームページからコミュニティの情報を探し出すことが難しいためか、「プール」や「トレーニングルーム」等の情報を話題にした人が多く、「公共施設の使用」に焦点が行ってしまうことが課題であった。

4. これからの私 (第24回)

(1) 授業の概要

本授業は以下2つの学習目標を設定した。

1. 自分の生活をよりよくするために、どんなことをしたらいいかを考える。
2. そのことに向けて、何をどのように頑張るかを話し合う。

この授業では、上記の目標を達成するために以下のような流れで行った。まず、今年度最後の授業として、全体で本教室の1年間の活動の振り返りを行い、教室で学んだことの中で、毎日の生活をよりよくするためのヒントがあったか、それは何か、なぜそう思ったのかを各自でワークシートに書いてもらった。次に、そのために何をどのようにすればよいか、3つのステップを考えてもらった。これは、よりよい生活のためにやりたいことを達成するための具体的なプロセスを考えてもらうためである。さらに、隣の人とペアになり、よりよい生活のためにやりたいことを話し、アドバイスし合った。そのうえで、4人程度のグループに

なり、よりよい生活のためにやりたいこと、その理由と具体的なステップを紹介し合った。その後、全体で発表するための練習の時間をとった。前半の活動の中では、日本人、外国人に関わらず、活発な意見交換が行われる様子が観察された。

(2) 「これからの私」の発表

後半は、全体活動として、1人ずつ発表し、聞き手からアドバイスをもらうようにした。発表は、グループでのアドバイスを取り入れてより具体的になっていた。その様子を以下の表3にまとめた。発表に関するやりとりは、授業録画から発表部分を文字起こししたが、表中の発話は意味が変わらない程度に簡潔にまとめた。発表は11名で、コーディネーター1名を除く日本語学習者6名と日本人学生4名(内1名は本教室運営にも関わる大学院生)である。

表3 「これからの私」全体発表の内容とアドバイス(発表順)

*日本語学習者(学習者1~6)の発話、日本人学生(学生1~4)の発話

	発表内容	発表時にもらったアドバイス
学習者1	日本語能力試験を受けたい。私にとって漢字が難しい。勉強時間を必ず取るようアドバイスをもらいました。 (アドバイスを受けて)合格しないと思います。でも、何足りない、やってみる。	・日本語能力試験のN2は漢字が多いので漢字の勉強をしなければならないと思います。(学習者3)
学習者2	健康のためにジムに行きたい。うちの近くのジムに行くと思います。 もっと勉強です。このセッションで日本語だんだん話すようになります。もっと話すようになりたい。	・誰でもいいから、話しかける。(学生3) ・仕事で話すチャンスはない。仕事以外で友達作って。テレビも正しい日本語あります。ニュース。ラジオ。(学習者1) ・せっかくここで友達できたから、セッションが終わっても一緒にしゃべりましょう。テレビは、字幕、文字が出ていることが多い。録画して。外国語を学ぶとき勉強していた方法。(学生4)
学生1	夏から留学するのでその前にドイツ語を勉強したい。グループでアドバイスもらいました。ドイツ語のコミュニティをネットで探して参加してみようと思います。	・学生4さんがドイツ語をべらべらしゃべれますから、教えてもらったらいいと思います。(学習者5) ・文法難しくないですよ。文法ぐちゃぐちゃでも通じます。(学生4)
学習者3	もっと運動したいです。卓球のサークルに1年くらい行ってないけど、来週から行きたいと思います。そして登山も行きたいんですけど。山岳会に入るために、まず一人で山を登って経験を、それから申し込みたいです。	・冬の富士山は登れますか？ 普通はだめですよ。(学習者6)

<p>学生 2</p>	<p>毎日朝、体操したいと思います。最近太ってきて、運動もしていないので。朝、早く起きて、部屋で体操しようかなと思っています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体操はやせないで、走ったほうがいい。ジムに行ったほうがいい。(学生 3) ・急に痩せるのはよくない。(学習者 1) ・泳ぐ。全部の体の運動。(学習者 4) ・運動しながらダイエットしたほうがいいと思います。(学習者 5) ・マラソンするといい。5キロとかもあるんですよ。(学生 4)
<p>学習者 4</p>	<p>日本語の勉強続けたい。もっと日本語、話せる、いい。日本語のドラマ、絵本、を読んで、日本語の日記します。学習者 2 さんのお勧めはドラえもん。学生 2 さんのアドバイスは、歌う。日本語の歌を。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習者 1 さんと一緒に日本語を勉強しましょう。(学習者 5) ・テストは日本語上手にならない。ドラえもんがいいじゃない？(学習者 1) ・ドラマやアニメを見る時は、まず、まねして。(学習者 2)
<p>学生 3</p>	<p>学校の勉強が難しいので勉強しようと思っています。そのために、ちゃんと計画を立てて、予備校行って、英語の能力試験の勉強もしたいと思っています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家で勉強しないほうがいい。僕は家で勉強できません。喫茶店に行って勉強します。(学生 2) ・図書館がお勧めです。あと、Youtube の動画もわかりやすいです。(学生 4)
<p>学習者 5</p>	<p>(日本語) レベルアップしたいと思います。一人でやる気ないから、読書会に参加したいと思っています。参加する読書会を探す、おもしろい原文 1 冊を読む、新しいことばを調べて覚えます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・単語帳だけでなく本だとストーリーラインがあるから覚えやすい。真似したいなと思って。(学生 1) ・下北沢や神保町におもしろい本屋さんがあって、読書会をしているところもあって。本屋さん巡りをするのもいい。(学生 4) ・読書会に入っています。日本語、英語、アラビア語、どれでもいい。ネットで。(学習者 1)
<p>学習者 6</p>	<p>いろいろなコミュニティを体験して自分にふさわしいコミュニティを探します。そのためにまず、ネットで調べます。そして、気に入ったコミュニティを見学します。いいと思ったら参加します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかコミュニティを絞ったほうがいいと思います。1人じゃなくて誰かと行くといいと思います。(学習者 5)
<p>学生 4</p>	<p>近隣の国際交流センターに行って、通訳のボランティアをしたい。この教室に来ている人が日本の生活で困っていることや、サポートやイベントがあったらいいのにな、というアイデアをいただいたし、自分でも考えることができたので。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・その国際交流センターも行ったことがあります。赤ちゃんを連れて勉強できる教室があります。言えば、見学させてもらえるんじゃないかと思っています。(講師)

表3からもわかるように、「これからの私」の発表の中では、新たなコミュニティへの参加表明が多く見られた。例えば、「ドイツ語学習のためにドイツ語のコミュニティを探す」(学生1)、「山登りをしたいので山岳会に入りたい」(学習者3)、「日本語のレベルアップのため読書会に入りたい」(学習者5)、「いろいろなコミュニティを体験したい」(学習者6)、「国際交流センターでボランティアをしたい」(学生4)などであり、これまでの授業では表明されなかったものも含め新たなコミュニティ参加の希望が語られた。また、発表に対するアドバイスの中でコミュニティ参加が促されることもあった。例えば、「もっと日本語を話すようになりたい」という日本語学習者2に対し、学生4は「セッションが終わっても、一緒にしゃべりましょう。」と、教室終了後も話し合うことができるコミュニティとして誘っている。また、ドイツ語を学びたい学生1や日本語の勉強を続けたい学習者4に対して、学習者5が、教室に参加する他の学生や学習者を共に学ぶ仲間として推薦している。このように、「これからの私」の回では、参加者各自が新たなコミュニティ参加を表明したり、アドバイスを通じてコミュニティ参加を促したりしており、「コミュニティ参加を促す活動」となっていた。

さらに、発表に対するアドバイスの回数を見ると、学習者12回 学生9回となっており、日本語非母語話者である学習者がより積極的にアドバイスをしていたことがわかる。例えば、日本語の勉強を続けたいと話す学習者4に対しては、同じ学習者である3名が、自身の学習経験からと思われるアドバイスを行っている。同様に、日本語をレベルアップしたいという学習者5の発表に対しては、学生1から、自身の言語学習の際にも「真似したい」と、むしろアドバイスとして受け止めた発言をしていた。このように、日本語母語話者と非母語話者という関係や、学生と社会人という年齢や経験の差として固定されがちな関係を越え、お互いの経験を基にした気兼ねのないアドバイスをし合うことができていたと言える。

IV. 成果と課題

1. 成果

以上のことから、1年間の本教室への参加を通して、日本語学習者、日本人学生ともに、自分の意見や経験を相手にわかるように語り、それに対して日本人、外国人問わず、相手の立場に立ってアドバイスができるようになった。1年間、実質23回の日本語教室で日本語学習者が日本語母語話者と同等の日本語能力を身につけるわけではない。日本語能力の差がある中でも、お互いの希望や悩みを理解し、自身の経験を踏まえて自分の考えとしてアドバイスができるということは、大きな成長と考えられる。

特に、第3セッションの活動を通して、自分の経験や意見を伝え、相手の経験や意見を聞

くこと、相手に相談したり、アドバイスしたりすることなど、自己開示をしながら相手を理解しようとする活動を行った結果、以下のような一定の成果が得られたと考えられる。

(1) 新たなコミュニティ参加を促す場としての教室

「コミュニティ参加を促す活動」として報告した「コミュニティ参加の経験を聞く（第21回）」では、M氏のコミュニティ参加の経験を聞くことで、学習者にとっては自身の過去を振り返り言語化し伝えることへの動機付けとなり、日本人学生にとっては外国人が置かれている状況や努力等を知ることによって外国人理解を深めるきっかけとなった。さらに、お互いのコミュニティ参加の経験を聞く活動は、コミュニティ参加を自身のこととして考える活動となっていた。

次の「コミュニティを探す（第22回）」では、今度は教室の仲間である日本語学習者の一人のコミュニティ参加体験を聞くことで、コミュニティ参加の経験が少ない学習者も刺激を受け、後半のコミュニティを探す活動では、コミュニティ参加経験や情報交換を通して、コミュニティ参加の意欲が引き出されていた。「コミュニティ参加を促す活動」は、単に教室内の練習ではなく、実際の生活を豊かにするためのコミュニティ参加として情報交換や意見交換を行うことが重要であると考えられる。しかし、この段階では「コミュニティへの参加」としての具体性は乏しく、新しい情報としての「公共施設の利用」といった「場」に焦点化されていた。

最終回の「これからの私」では、各自がよりよい生活のために何ができるかを考え、そのための具体的なステップとして、新たなコミュニティ参加を含む希望が語られ、アドバイスを通してより具体化することができた。この「参加を促すための活動」においては「促す」のは教室運営者だけではなく、教室の全ての参加者がお互いのコミュニティへの参加を促す当事者となっていた。

(2) 参加者の相互理解、関係性の深まる場としての教室

以上のように、日本語学習者と日本人学生が共に学ぶ仲間として、「コミュニティ参加」について意見や経験を伝え合い、お互いの意見や経験を聞くことを通して、コミュニティ参加が促された。そのプロセスで、参加者同士が、日本語母語話者と非母語話者として、あるいは、社会人と学生としての違いを乗り越え、お互いを理解し合おうとすることを通して、人間関係が深まったと考えられる。つまり、「コミュニティ参加を促す活動」を通して、教室自体が一つのコミュニティとして、参加者同士が相互理解、関係性の深まりによって相互に参加を促し合うプロセスでもあったと言えるのではないか。

相互理解や関係性の深まりとともに、相手にわかりやすく話せるという各自の日本語によるコミュニケーション能力の向上も見られた。第2セッション最終日の授業終了後に行った

日本人学生との振り返りでは、相手に合わせて日本語を調整することの大切さに言及されていたものの、その難しさも多く語られていた。しかし、「これからの私」の発表で明らかのように、各自が相手にわかりやすく発表し、アドバイスをすることができた。日本人学生の日本語学習者に対する日本語によるコミュニケーション向上は、日本語を調整するための技術という点では十分とは言えないが、相手への理解や相手との関係性の深まりにより、変化があったと考えられる。一方で、日本語学習者においても、日本語能力に差があり、メモを読みながら発表する学習者もいた。しかし、アドバイスをし合う場面では、自身の社会経験に基づく真摯なアドバイスを行うことができた。コミュニケーション能力において、相互理解及び関係性の深まりが重要であることがこの実践からもうかがえる。そして、第3セッションのテーマは「暮らしを良くしていこう」であり、単にどこかのコミュニティに参加すればよいということではなく、コミュニティ参加が各自の生活をより豊かにしていくためのものとして受け止められ、そのためのやり取りが行われたことに意義があると考えられる。

2. 課題

以上のように、「日本人学生」と「日本語学習者」が「コミュニティ参加」について意見や経験を伝え合い、お互いの意見や経験を聞き入れることで、相互理解及び人間関係を深めるとともに、自身の生活を豊かにしていくためのやり取りを実践できたという取組の成果を述べた。最後に、本取組の課題について以下の2点に絞って述べ、稿を閉じる。

(1) 日本人参加者

本教室で学んだことについて日本人学生にアンケートを実施したところ、「外国人とやり取りをしながら、外国人への理解が深まった」というような記述が最も多く見られた。また、授業中の発言の中で、「外国人の経験を聞いて、自身が海外に行ったら、同じようなことができるように頑張りたい」等のように、外国人の話を「自身の立場」に置き換えて理解し、視野が広がっている行動が多く観察されている。このように、「内容面」「態度面」において日本人学生の成長や変化が見られている。

「言語面」において、1人1人のレベルに合わせて日本語がうまく調整できず、コミュニケーションの難しさを実感するなど、言語調整に対して意識化ができていない。一方で、作成教材において初級前半の語彙や文型を使って日本語のレベル設定が行われているが、グループの話し合いとなると、伝えたい内容を伝えることに集中した結果、日本語学習者のレベルに合わせて日本語を調整する余裕がなく、普段通りの話し方になってしまった。この課題について、「やさしい日本語」や「第2言語習得」について一定の知識を提供するとともに、毎回の実践を振り返る機会を設けることで、外国人との話し合いを実践しながら、実践から日

本語の調整について学んでいけるような工夫が必要だと考える。

(2) 外国人参加者

次の課題は、外国人参加者に関わるものであるが、1つ目の課題とも関連している。本教室の外国人参加者は、日本人学生との話し合いで自由に発言できる上級者から、話し合いについていけるように、相手の言語面の調整を必要とする初級者まで、日本語のレベルが様々であった。本稿で取り上げている第3セッションは、初級者の脱落が多く見られた。その理由としては、①で述べた課題に加え、次のことも考えられる。第1セッションと第2セッションは、「マナーやルールについて話す」や「仲間とともに取組む」など、話し合いの内容が具体的で、映像や身体等の資源が利用されているため、初級者も学べる形態であるのに対し、第3セッションでは、「コミュニティ参加」について自身の経験を話したり、相手の経験に意見を言ったりするなど、高度な言語能力が必要となる内容になっている。今後、「コミュニティ参加」という内容について、初級者も準備して話せるような内容や手順を想定し、日本人参加者や日本語が堪能な学習者も日本語の調整を通して支援に取組める体制を整えるなどの工夫をすれば、「様々なレベルや背景の人が学べる地域日本語教室」にさらに近づけることができるのではないかと考える。

参考文献

- 出入国在留管理庁 (2021) 「令和2年末現在における在留外国人数について」 http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00014.html (2021年7月20日)
- 出入国在留管理庁 (2021) 「令和2年末現在における在留外国人数について (公表資料)」 <http://www.moj.go.jp/isa/content/001344904.pdf> (2021年7月20日)
- 出入国在留管理庁・文化庁 (2020) 「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/92484001_01.pdf (2021年7月20日)
- 文化庁 (2020a) 「社会の一員となることを目指す日本語学習の環境作り—多文化共生社会における地域と大学の連携—」『2019年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム (B) 実施内容報告書』日本語教育コンテンツシステム <http://www.nihongo-ews.bunka.go.jp/contents/view/%3Fid%3D1213%26keyword%3D%25E5%25AD%25A6%25E7%25BF%2592%25E9%2599%25A2%25E5%25A4%25A7%25E5%25AD%25A6%26limit%3D10%26order%3D4%26category%25B70%255D%25B%255D%3D44> (2021年7月20日)
- 文化庁 (2020b) 「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/92484001.html (2021年7月20日)
- 文化庁 (2019) 「日本語教育の推進に関する法律の施行について (通知)」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html (2021年7月20日)

(ト チョウシュン 学習院大学国際センター准教授)
(からきさわ みどり 学習院大学国際センター PD 共同研究員)